

## セッション5. 3

# チェルノブイリ事故後のウクライナにおける 小児甲状腺がん（仮訳）

ミコラ・トロンコ<sup>1\*</sup>, T ボサノバ<sup>1</sup>, 馬淵清彦<sup>2</sup>, モーリーン・ハッチ<sup>2</sup>, I リカレフ<sup>3</sup>, アンドレ・ブーヴィル<sup>2</sup>, V オレイニク<sup>1</sup>, V シュパク<sup>1</sup>, V テレシチェンコ<sup>1</sup>, アリーナ・ブレナー<sup>2</sup>, Zurnadzgy L.<sup>1</sup>, Zamotaeva G.<sup>1</sup>, Gulak L.<sup>4</sup>, Shchepotin I.<sup>4</sup>

<sup>1</sup> キエフ内分泌代謝研究所、キエフ、ウクライナ

<sup>2</sup> 米国国立がん研究所、ベセズダ、アメリカ合衆国

<sup>3</sup> 放射線医学科学センター、キエフ、ウクライナ

<sup>4</sup> ウクライナ国立がん研究所、キエフ、ウクライナ

チェルノブイリ事故当時0歳から14歳、および15歳から18歳であったウクライナの調査集団10万人における甲状腺がん症例および罹患率に関する調査が1986年から2012年の期間に実施された。

被ばくした小児および青年の集団における甲状腺がん発症例が1990年以降大きく増加していることが判明した。この傾向は22年間(1990~2012)継続している。最も汚染程度の高かった6地域における罹患率は、他のより汚染程度の低い21地域よりも調査期間中一貫して高かった。手術を受けた年齢で見ると、小児では1996年から1998年、青年では2000年から2002年が最も多くなっている。

ウクライナにおいて、最も腫瘍形成の潜伏期間が短かった(4~6年)放射性甲状腺がん発症の調査集団の年齢分布をみると、事故当時最も若年の集団に放射線影響が現れていることに特徴があり、これは福島において検診後に見られた年齢分布とは大きく異なっている。

ウクライナ人—アメリカ人甲状腺がんコホート調査における調査集団1000人中の甲状腺症例数はその後検診を行うたびに減少していたが、2年サイクルでの検診の4度目の時点でも、調査集団1000人中1.5例と著しく高い水準にあった。第1および第2サイクルにおいては、調査集団1000人における甲状腺がん発症例数が甲状腺被ばく線量の増大とともに増加したが、第3および第4サイクルでは、そのような関係を確認することはできなかった。

検診サイクル 4 回の結果、甲状腺がんがあることが判明したコホート集団 110 人が 1998 年から 2008 年にかけて手術を受けた。その 110 例のうち甲状腺乳頭がんが 104 例（94.5%）と圧倒的に多かった。